





八月廿

日記

元記二

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

SS
A*

22
78
↓



さねづく一松葉に履き及まぬの徳
日返せり少くとも三賢を会へば何
音楽とをもつれいまだらにむら
山うれくこま月も古夏の焼をい
け風ハを席に帯とあつて石上は塵
なくまめらりたふる言路を歩いきよ
るの氷あつらさぬのこしやうやな

詞

甲子

いよは菴室のじらへ葉内やいれし
きしうしの家いむら心いをまかせ

きり

いよは葉内やこそせとらるる系者
是ち此あつらひは宿仕客信少くい
わねはよたまうらるるいよはあつれ
三よよら命たをかり中事一むとも
か難うい此事やこし為よ是まて

幸いでし 日多かりともうぬや
 承とせうれ 命をたまき中とらむ
 もふらと作 都東に院れあし
 てまは事也 せて思召あし
 かりのほこり 事とて
 さらし 此報思は打る中
 成望三のり 刹那に叶へる

幸にひびきのあし 又も
 一竹りし事 世の事
 だく釋尊灵山 かくれ法説法乃ち
 まのあし 深に
 ことば 世安寺法乃ち
 二むは 一りさハ 昂拜させ中
 むし ことば 思召すあし

瑞亭の廣眼子浮一心二合三堂四
一命頂礼大恩教主釋迦如來と恭敬
禮拜以る程二に俄三に名震四し一寺震動
帝釋天より下二に降り三て四と五り六又
上天の一を二の三く四強五き六を七う八け九を十る
きふ一し二し三る四又五剎那六の七百八を九見
城の一く二帝釋三あり四く五わ六れ七敷八千九れ十魔術

を清一る二ま三き四ら五か六つ七れ八大九會十散一こ二子
あり一て二と三見四た五り六き七る八帝釋九は十時
伊一弖二行三ひ四く五ら六る七ま八の九位十を
を一と二奪三う四け五と六た七ら八ま九ら十こ一ん二く三子
若一を二忍三勢四勢五の六ハ七羽八同九と十た一く二ハ三お四け
ら一し二と三は四ま五を六もち七り八羽九子十成一て二飛三行
もう一れ二ハ三こ四ろ五を六ま七れ八有九れ十一一一二

